

源をカントの批判哲学に観る。そこから、ドストエフスキーはイワンの姿を通じてカント哲学への批判を行っているというのがゴロソフケルの解釈である。ドストエフスキーは思弁と感性の二つの深淵を同一瞬間に受容させることで解決を図った。それは心情の知により形式論理を破ろうとする試みでもあった。

「マドンナの理想」と「ソドムの理想」を同時に受容するというドミトリーの立場、それは二重世界の矛盾を受け入れ、実体化した矛盾にひそむ生活の意味を高唱することである。テーゼとアンチテーゼの矛盾の永久の決闘であり、ドミトリーにとりそれは秘密と神秘の結合ともなり、悲劇的で悪魔的な美としての生活を開示する。そこには、闘争、矛盾を徹底的に生きることを通して、カント的な二律背反の袋小路からの出口が「生ける感情の良心」、「愛の熱烈な活動、実行」におのずと求められていくというドストエフスキーの救済の方向が示されることになる。

カント『宗教論』における

「根本悪」の普遍性

保 呂 篤 彦

『宗教論』第一篇の叙述によると、「根本悪」とは、道徳法則に反する動機を「道徳法則への尊敬」に優先するものとして「格率」に採用する「選択意志」の「性癖」である。このため人間の「心術」は腐敗しており、人間が形成する「格率」はす

べて悪であって、そこから生じる全行為が、「道徳性」の観点からは悉く悪しきものとならざるをえず、この意味で、この悪は「根本的」なのである。しかし、それはあくまで「素質」ではなく「性癖」であるから、人間が自ら招いたものと考えられる。こう見る限り、「根本悪」とは、各人がそれぞれ自分で招いた《個人的悪》であり、それが「普遍的」であるのは偶然でしかないように思われる。つまり、「根本悪」の「普遍性」とは《個人的悪の総和》でしかなく、「根本悪」と「人類（人間性）〈Menschheit〉」との関係は偶然であるように見える。

そうであるから、この《個人的悪》をカントが人類の全成員に帰すのはなぜか、いかなる根拠をもってその「普遍性」を主張しているのか、研究者の議論の対象になる。

ところが、「悪原理に対する善原理の勝利と地上における神の国の建設」と題された『宗教論』第三篇でカントがその克服を論じる悪は、《人間は一緒にいるだけで互いに他を悪くする》という、まさに《人類的悪》であり、しかもそれは、第一篇で既に論じられた「比較する自愛」という「人間性〈Menschheit〉の素質」の誤用の結果としての「文化の悪徳」に他ならない。この《人類的悪》の克服には、個人の道徳的完成だけでは不十分であり、人類が「倫理的自然状態」を克服し、「倫理的公共体」を建設することが求められるが、そのためにはさらに神が要請されるとカントは主張する。彼は、個人による悪の克服が「倫理的公共体」の建設という人類の完成と不可分であることを自覚していたと考えられる。カント本来の普遍的「根本悪」は《個人悪の総和》ではなく、人類全体としての道徳的

第2部会

完成によらなければ克服しえない『人類的悪』として構想されていたと見るべきであろう。

この『人類的悪』としての「根本悪」の導入は、『基礎づけ』や『実践理性批判』におけるカントの理論に重要な変更・発展をもたらした。『基礎づけ』における「目的の国」と『宗教論』における「倫理的公共体」ととつての神存在の意義、『実践理性批判』と『宗教論』における神存在の要請の意義の相違などは見落とすことができない。前者においては何れも、他者と切り離された個人による道德的完成の可能性が前提されており、神は人間の道德生活の成立自体に本質的な関係をもたないように見える。むしろ神は、人間の思い通りにならない「自然」の創造者として、徳に見合う「幸福」を担保するためにこそ要請される。また『基礎づけ』や『実践理性批判』では、法則違反へと人間を誘うのも感性を触発する「自然」であつて、『人間仲間』は法則違反とも「幸福」とも直接の関わりをもたない。これに対して『宗教論』では、個人を悪へと誘うのは彼を取り巻く『人間仲間』であり、さらに「幸福」も「自然」との関わりではなく、『人間仲間』との「比較」において規定される。それゆえ「最高善」も、個人の道德的完成（「最上善」）と「自然」に発する相応の「幸福」との結合ではなく、「根本悪」の克服を可能にし、それを通して各人が本来の「幸福」を得るべき「倫理的公共体」の実現として見られることになる。

しかし、『宗教論』第一篇と第三篇との間には、やはり埋めがたい溝があるのかもしれない。「根本悪」論は、『基礎づけ』や『実践理性批判』など批判哲学の道德論や行為論の延長線上

で悪を論じる思想の流れと、『人間学』や歴史哲学的諸著作など経験的な学の延長線上で悪を捉える思想の流れとの合流点であり、両者の総合の成否は全体としてのカント哲学の一貫性・統合性にまで関わる。この点、今後の研究を通じて慎重に判断したい。

カントの宗教論の意義について

氷見 潔

いうまでもなく、カントの『宗教論』（＝単なる理性の限界内における宗教）は、宗教についての彼の見解を最もまとまつた形で表明しているものとして、宗教の哲学的考察に貴重な指針を与える書とみなされている。しかしながら、私の見解では、この書は、実のところなお十分に正當かつ肯定的な評価を得ているとはいえない。むしろ不当に低い、否定的な評価を受けている面が目につく。そうした不当評価の代表的な面として、以下の二つを挙げねばならないであろう。

第一に、カント哲学思想内部での位置づけに関して、一般的には『宗教論』は三批判と同列に扱われてはいない。おそらく、それは元來啓蒙的な雑誌に掲載されるに適した内容の「論集」にすぎない、という見方が、そのまま同書の一段低い格づけにつながっているのであろう。第二に、カントは同書においてあくまで哲学思想の側から宗教考察に取り組んだのである